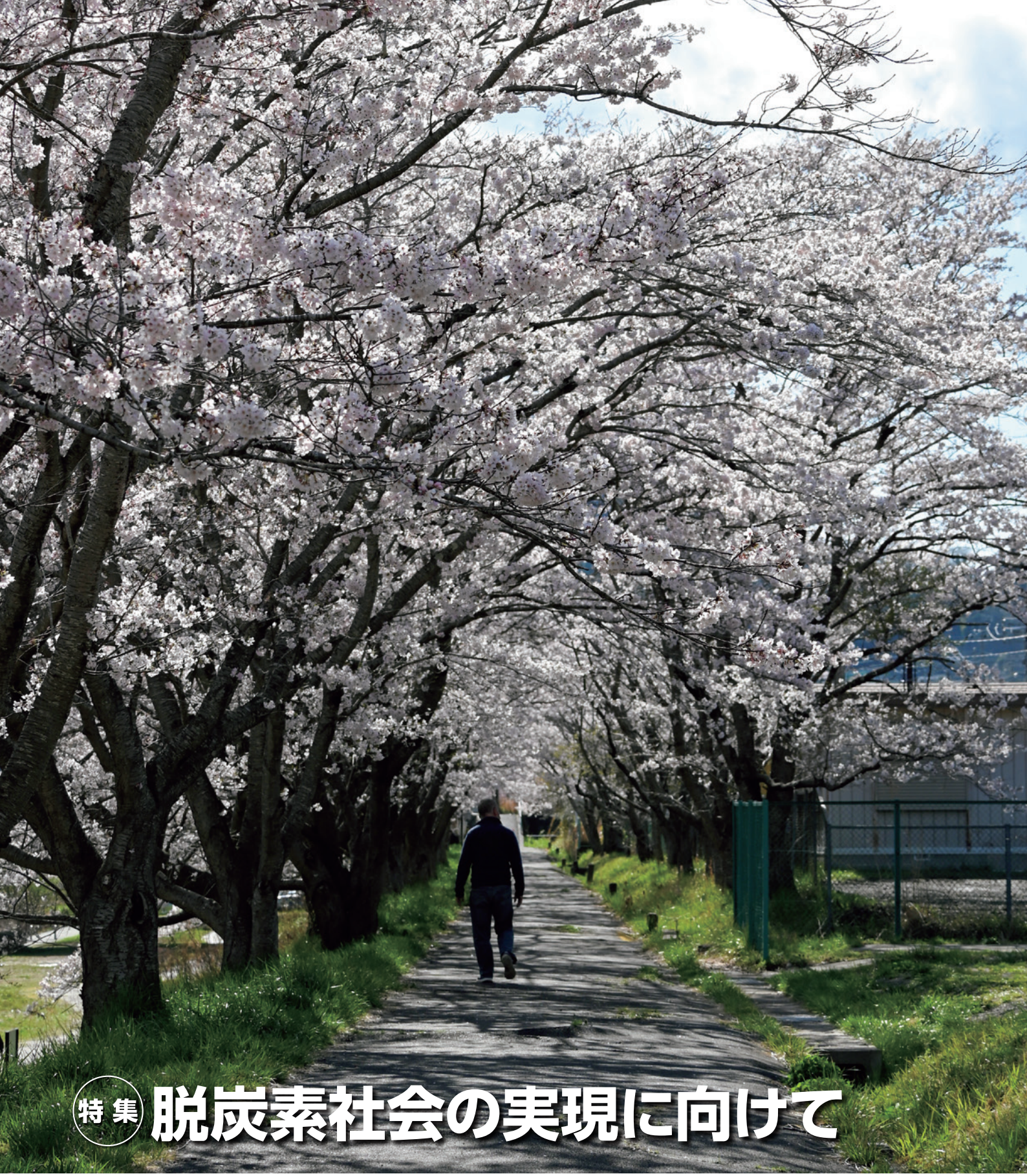


特集 脱炭素社会の実現に向けて

やまなし
自治の風
Yamanashi JICHI no KAZE

Vol.53 March.2023

contents

巻頭随想
市町村リレー まちづくり夢づくり
苦言提言
地域シンクタンク
市町村の元気印

machijiman

お問い合わせ先

所 在 地：富士吉田市上吉田東 7-27-1
開館時間：午前 9 時 30 分～午後 5 時 00 分（入館は午後 4 時 30 分まで）
休 館 日：火曜日、年末年始（GW 及び 7 月、8 月は無休）
観 覧 料：大人 400 円 (団体 320 円)・小中高生 200 円（団体 160 円）
電話番号：0555-24-2411

シリーズ
ま・ち・自・慢 富士吉田市
Fujiyoshida-City

富士吉田市歴史民俗博物館 ふじさんミュージアム

VOL.53 March. 2023 machijiman

富士吉田市歴史民俗博物館は、平成27年4月より施設の改修及び展示内容をリニューアルし、「ふじさんミュージアム」という愛称を冠し運営しています。

世界文化遺産「富士山」の価値と魅力を紹介するとともに、未来に引き継ぐための施設として、教育施設というだけでなく、新たな観光資源としての付加価値を高める役割を担っています。

国道を挟んだエリアには「道の駅富士吉田」、「富士山レーダードーム館」、「ふじやまビール　ハーベステラス」等の年間１８０万人を超える観光客が訪れる観光集客拠点があり、令和４年７月には「富士吉田忍野スマートＩＣ」が開通し、本エリアへのアクセスが容易になりました。更には、令和５年４月にふじさんミュージアムを中核施設として周辺エリアを整備した「富士の杜・巡礼の郷公園」がオープンし、新たな富士山文化の拠点となる予定です。

本公園オープンに合わせ、ミュージアムでは富士山の迫力あるＶＲ映像を導入します。３６０度パノラマ投影と床面に拡がる高精細な映像の立体感と没入感は「ここでしか見られない」富士山の映像を展開します。

やまなし
自治の風
Yamanashi JICHI no KAZE
Vol.53 March.2023

Contents
Yamanashi JICHI no KAZE Vol.53 March.2023

まち自慢　富士吉田市

02 巻頭随想　村民「ワンチーム」の村づくり 「山中湖村の未来創造」実現に向かって
山中湖村長　高村 正一郎

04 市町村リレー　鳴沢村

08 苦言提言　山梨から山梨を思う
総務省 地域力創造グループ地域政策課
理事官　関口 龍海

09 特集「脱炭素社会の実現に向けて」
10 特集1　ゼロカーボンシティに向けた取り組み
12 特集2　やまなしモデルP2Gシステムによるグリーン水素の取り組み
14 特集3　4パーミル・イニシアチブの取り組み
16 特集4　「繋ぎます!人と自然がいつまでも輝くまち」の実現に向けて
18 特集5　持続可能な社会の構築に向けて

20 講演録
26 地域シンクタンク
28 市町村の元気印
30 自 治 Q & A
33 山梨県のSDGsの取り組みについて
36 がんばっていま～す。
38 はつらつ!!市町村職員
40 市町村振興協会たより
時の人
編集後記

■表紙写真　桂川河川敷の桜並木

JR上野原駅の南口から歩いてすぐの桂川の河川敷では、春になると桜並木を楽しむことができます。四季折々で変化する桂川の水辺の風景は、歌人の与謝野鉄幹・晶子が愛し、多くの歌を詠んだことでも知られています。【上野原市提供】

村民「ワンチーム」の村づくり「山中湖村の未来創造」実現に向かって

高村 正一郎 山中湖村長

高村 正一郎（山中湖村長）
PROFILE
昭和28年2月20日生まれ（70歳）
日本大学法学部卒業
昭和52年 4月 山中湖村役場に奉職
令和 2年12月 山中湖村長に就任
現在1期目

花の都公園からの富士山

世界遺産富士山に一番近い湖〝山中湖〟

山中湖村は、人口約5，800人、山梨県の東南部、標高約1，000mに位置し、富士山に一番近い富士五湖最大の湖「山中湖」を中心に、緑豊かな自然に囲まれ、湖越しに臨む姿が圧巻の四季折々の富士山をはじめ、秋の紅葉、冬の樹氷、ダイヤモンド富士など季節ごとの絶景と、村民の皆様の温かい心が魅力の村です。

2021年には1年延期された東京2020オリンピックが開催され、自転車ロードレース競技では、コース会場となった本村を世界を代表する選手が駆け抜けるという歴史的イベントが実現し、サイクリストが一度は訪れたい場所「自転車の聖地」としての環境整備など、地域の魅力を高める取組みを続けています。

村民参加型行政の推進

私が生まれ育った大好きな山中湖村の村政を、村民の皆様に託していただき早くも2年の月日が過ぎました。

この間、全村民が安心安全に暮らし笑顔ある村づくりに向け「住む人、訪れる人の安心安全の確保」「移住者にも優しい村づくり」「観光活力ある山中湖づくり」「村の次世代を担う子ども・働く世代の支援」「信頼される行政と他自治体との協働」の5つの叶えるビジョンを掲げ、ワンチームで村民参加型行政の実行に取組んでいます。

私の政治姿勢の一番の基本は村民第一であり、そのためには、まず村民の皆様の考えをお聞きすることが基本であり重要になります。村長就任以来、村長室に村民対話室を設け、これまでに沢山の方々に来訪いただき、村政への貴重なご意見や

的確なご指摘を頂戴しております。また、昨年は自治の高度化を目指し、村民自らが村の現在・未来についての協議を通して、当事者意識の醸成と自主的な村づくりの参画への仕組みを築くため山中湖村未来創造村民会議を創設しました。応募により若者や女性を含め幅広い年代の方が委員となり、村の重要課題等について提言することを最終目標として協議を重ねています。

村長室に設置した「村民対話室」

魅力ある付加価値を高めるための新しい村づくり

3年以上に渡るコロナ禍は、生活習慣・ワークスタイル、各種産業の構造や形態に変化をもたらし、村民生活や村の産業経済にも甚大な影響を及ぼし続け、特に村の基幹産業である観光は危機的な状況に直面しました。こうした難局を乗り越え、本来の姿を取り戻すべく、昨年は万全の新型コロナウイルス感染症対策を講じたうえで、数々のイベントの開催や新たな企画にチャレンジしました。5月に、第42回スポニチ山中湖ロードレース大会を3年ぶりに実施し、SDGs推進の一つとして参加通知書や記録証のペーパーレス化、紙コップ廃止の取組みを導入しました。夏には、報湖祭花火大会を前年より打上げ箇所を増やし実施、また、新規イベントとして、花の都公園でフラワーアウトフェスティバルを開催しました。花の村宣言を唱え、高い標高を生かした花き栽培を中心とした産業のブランド化、花であふれた景観づくりをテーマに、山中湖観光振興公社が中心となり、山梨県をはじめ、数多くの企業のご協力により様々な催しを企画しましたので、今後も新しい産業の創出に努めてまいります。

更に目玉イベントとして、最新テクノロジーを活用した作品やデジタルコンテンツが国内外で注目されているアート集団チームラボによる光の幻想的な展覧会を10月から11月にかけて「夕焼けの渚紅葉まつり」と同時に開催したところ、相乗効果もあり両イベント合わせ約16万人の方にお越しいただきました。

山中湖夕焼けの渚紅葉まつり・チームラボによる光のアート空間

こうしたイベントによる経済波及効果は非常に高いと考えていますので、引き続き付加価値の高い観光地として新たな魅力を創出するための誘客事業を展開していきます。

この他にも、村内各所で様々な取組みを進めています。

山中明神前交差点周辺整備は、交通結節点の多機能化と、村の玄関口にふさわしい景観形成が事業着手段階となり、近い将来、皆様から愛され利用しやすい空間が創出される予定です。

老朽化が進む公衆トイレに関しても、誰もが使いやすく、快適・安全・清潔で美観に配慮することを理念に、改修・建替え等の是非や循環型エコトイレの設置を検討する「やまなかこパブリックトイレプロジェクト」を進めており、順次整備を実施しています。

また、今年2月には、NHK連続テレビ小説エールでも話題となった、本村ゆかりの世界的なオペラ歌手・三浦環さんの立像を交流プラザきららに設置しました。疎開先の山中湖畔で毎朝発声練習を行い、その歌声は湖の対岸にまで届いたと伝えられている姿を彷彿させるモニュメントが、山中湖の芸術・文化的なイメージを来訪者の心に響かせてくれることを期待しております。

今後も、全村民が村の未来創造に向かって一丸となりスクラムを組み、豊かで多様な暮らしを持続可能な形で実現していくため、新しい発想と柔軟な姿勢でスピード感を持って、村民の皆様とともに全力で取り組んでまいります。

市町村リレー

まちづくり夢づくり

鳴沢村 50

MACHIZUKURI YUMEZUKURI

心地よく健やかに暮らせるために みんなでつくる鳴沢村

鳴沢村全景

鳴沢村は富士山頂から大沢沿いに静岡県富士宮市と接する山梨県の南端に位置しています。標高900～1，200メートルにあり、村の面積は約90平方キロメートル、85％以上を山林が占める、人口約3，100人の小さな自治体です。

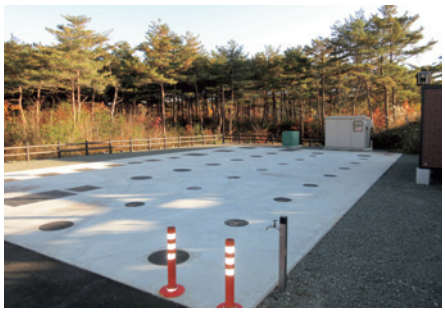
都心から90分という好立地にありながら、富士山の麓に広がる大自然に囲まれており、四季折々の富士山の姿を楽しむことができます。富士山の地下を流れる伏流水を汲み上げた水道水はミネラル豊富で大変美味しく、空気も澄み渡っています。冷涼な気候が育む農作物は、凝縮した旨味とみずみずしさが自慢です。

村には、富士山の絶景を撮影できる約24，000平方メートルの「活き活き広場」や、村営温泉「いきやりの湯」などがあり、子どもからお年寄りまで健康的な生活を楽しんでいます。また、

体育館や武道館、屋内テニスコート場、トレーニングルームなどのスポーツ施設が充実しており、クラブ活動や住民の健康増進に利用されています。

災害に強い村づくり

本村及び周辺地域において発生が懸念されている災害として、主に東海地震および南海トラフ地震などの「地震災害」、富士山噴火による「火山災害」、地球温暖化による降雨の一点集中などの「土砂災害」が考えられます。このような大規模自然災害が起こっても機能不全に陥らない強靭な地域を構築するために、鳴沢村では国土強靭化基本計画に基づいた防災・インフラ整備を順次進めております。その一環として、防災備蓄倉庫の整備、避難所運営に必要なダンボールベッドや間仕切りなどの資材を購入し、令和3年度は、村の指定緊急避難場所・観光客等の一次避難場所となっている道の駅なるさわに、災害時の応急仮設トイレ機能を備えた浄化槽を設置しました。


災害時の応急仮設トイレ機能を備えた浄化槽

また、防災行政無線非常用電源装置の機器更新、消防団活動で必要となるインバーター発電機・LED投光器の整備、防犯灯のLED化事業を進めています。地震への備えとして水道管の耐震化も順次進めており、あわせて道路の舗装打ち換え工事も行い、大きな災害に備えております。

ハード面だけでなく、令和4年6月には土砂災害、9月に大地震、12月には富士山噴火を想定した防災訓練を行いました。さらに防災意識向上を目的として、小学生を対象とした出前防災教室も実施しています。子どもたちも地域の災害に関心を持ち、災害から身を守るためにどんなことをしたら良いのかを調べ、考え、学びを深めています。自分の住んでいる地域で起こる災害について知ること、自分で考えて動くことの大切さを伝えています。

ペーパーレス化・ICT化の推進

議会では、ペーパーレス化、業務効率化を進めるためにタブレット端末の運用を開始しました。データをクラウド上に蓄積することでその場で確認ができ、活動のスピードアップが図られ、迅速な情報共有・提供が可能となりました。今後も完全ペーパーレス化を目指して体制を整備していく予定です。

保育所では、保育士と保護者のリアルタイムでのスムーズなやりとり、事務の効率化、負担軽減を目的としてICTシステムを導入しました。両者が保育と向き合う時間をより多く確保することで、これまで以上に保育の品質や安全性が向上するように努めていきます。

議会のタブレット端末運用

鳴沢村の良さを県外の方に知っていただくために

鳴沢村を多くの皆様に知っていただく機会として、毎年10月に富士・鳴沢紅葉ロードレース大会を開催しています。モスクワ、ロサンゼルス、ソウルと3度オリンピック日本代表に選出された瀬古利彦さんを大会アドバイザーに迎え、全国各地から募った参加者が鳴沢村の紅葉や高低差のあるコースを楽しみながら走ります。第11回となる本年度は、コロナ禍ということもあり規模を縮小して3年ぶりの開催となりましたが、村の人口の半分ほどである1，584名のランナーにエントリーをしていただきました。参加賞は、地元の新鮮野菜セットや特産品であるブルーベリージャムなど7種類の中から

富士・鳴沢紅葉ロードレース大会

選べるようになっており、大変好評をいただいております。

また、鳴沢村ホームページ内にある富士山ライブカメラを新たに設置し、活き活き広場から365日異なる富士山の姿をお届けしています。裾野まで美しく見えるので、観光にくる方だけでなく、富士山カメラマンにも利用をしていただいています。

情報発信に関しては、ツイッターやインスタグラムといったSNSを通して鳴沢村公式マスコットキャラクター「なるシカくん」が旬の鳴沢村についてお伝えしています。発信だけなく、「#（ハッシュタグ）なる写わ」をつけて投稿いただいた富士山写真の中から、毎年村民カレンダーの写真を採用させていただくなど、双方向でのコミュニケーションを行っています。

地域資源を活かした観光事業

富士山の北側の広大な裾野から山頂付近までを有する自然豊かな本村は、富士山をはじめ、森林限界の絶景が楽しめる「御庭」、自然が生んだ庭園「奥庭」、自然を味わい文化や歴史に触れる「東海自然歩道」「青木ヶ原樹海」、富士山と五湖が展望できる「五湖台」「三湖台」「紅葉台」などがあり、国際的な観光地としても親しまれています。富士山のパノラマ風景を眺めながら、ゴルフやスキー、ハイキング、キャンプ、乗馬なども楽しむことができ、山をご神体とする珍しいパワースポット「魔王天神社」、富士の噴火の溶岩が残した「鳴沢氷穴」「溶岩樹型」も人気があります。近年では、観光に訪れた方の利便性を考え、バスレーンや停留所、ポケットパーク、看板の整備を行いました。外国人観光客に向けては、3カ国語に対応したパンフレットの作成や、QRコードを活用した多言語での観光案内看板を設置しています。

奥庭

紅葉台

鳴沢村の魅力のひとつであるブルーベリー狩りは、品質の良いブルーベリーが500円で40分間食べ放題というお得さ、種類の多さからリピーターが多く訪れています。

道の駅なるさわでは、鳴沢村で育った新鮮な高原野菜やフルーツ、地場産の原料を使った加工品や山梨県のお土産など各種商品を取り揃えた物産館、郷土料理でもあるせんどそばやビスケットの天ぷらを食べることができる軽食堂、富士山について楽しく学べるなるさわ富士山博物館、自然探索路、展望台など施設も充実しています。春にはツツジ祭り、夏には収穫祭などのイベントが開催され、地域資源を活かした観光事業も推進しております。

子育て・高齢者支援

令和４年11月に、寄付金を活用して活き活き広場に子どもたちが自由に遊べる大型複合遊具を新設しました。全長15メートル、高さ５メートルの鳴沢村では一番大きな遊具で、既に子どもたちの人気スポットとなっています。村の児童館は、村内在住の方に無料で開放しており、放課後の子どもの居場所として利用されているほか、生涯学習の場として各種文化教室も開催しています。

高齢者福祉の面では、鳴沢村ご当地体操「ふじの山」を毎日２回ＣＡＴＶで放送しています。新型コロナウイルス感染症の影響で、外出する機会が減り運動不足の高齢者の健康の保持・推進を目的としており、病院スタッフ、老人福祉施設、農家のみなさんなど村で活躍する方々に出演していただき体操映像を作成しました。

ご当地体操「ふじの山」

さらに、高齢者の交通手段の支援として、70歳以上の運転免許証を所持していない方、60歳以上で運転免許証を返納し運転経歴証明書を所持している方を対象に、バスのシルバー定期券またはタクシー券の助成を開始しました。この制度は、まだ開始して１年ほどですが、高齢者の足としてだけではなく、地域の見守りやフレイル予防にもなると期待しています。

鳴沢村を選んでいただくために

リモートワークやワーケーションなど多様な働き方ができる今、鳴沢村を選んでいただくために様々な施策を行っております。従来から実施しております三世代同居支援事業、都市部からの移住支援に加え、定住促進新築住宅等購入支援補助金を創設しました。

また、鳴沢村に住民登録がある方を対象とした村営温泉「いきやりの湯」があります。住民の絵画や、地元をホームタウンとする女子サッカーチームの紹介展示なども行っており、憩いの場として多くの住民が利用しております。

いきやりの湯

令和４年３月には、鳴沢村の顔となるホームページを全面リニューアルしました。より見やすく、より情報に辿り着きやすいホームページを目指し、日々更新をしております。鳴沢村への移住定住を考えていただく際に、良い部分だけでなく、「寒さが想像以上に厳しい」「移動には車が必要」など不便な部分も知った上で鳴沢村に来ていただきたく、鳴沢村に住むメリット・デメリットを掲載したページをホームページ内に作成中です。

結びに

今年度も様々な世界情勢や新型コロナウイルス感染症の影響で制限のある生活が続いております。

当村ではコロナ禍における原油価格や電気・ガス料金を含む物価高騰の影響を受けている村民の負担軽減を図るために１人につき１万円のくらし応援給付金と、１人につき１万円のくらし応援商品券を支給いたしました。今後も時代の変革にあわせた取り組みを行い、子どもからお年寄りまで安全に安心して暮らせる小さくても輝ける鳴沢村を目指して村政を推進していきます。

山梨から山梨を思う

苦言提言

Kugen Teigen

関口 龍海
Ryuukai Sekiguchi

総務省 地域力創造グループ地域政策課
理事官（前甲斐市副市長）

早いもので、甲斐市を離れて1年近くが経ちました。とはいえ今でも県内在住のため、心情的にも東京は遙か、日々の出勤は今もちょっとした出張気分です。

奇しくも現在は、地域活性化を担当しています。田舎者の気分が有り難くも活かされて、国の方針への違和感や、他地域の取組に刺激を得ることも沢山あります。

ここでは役人の立場と、山梨に根を下ろした田舎者の立場（私はお寺の住職もしていますので、古い地域の感覚も大切にしながら）の双方の観点で、少し雑感を述べてみたいと思います。

1 移住政策は必要なのか。

移住促進が重要なのではなく、地域の人口増加の取組が必要なのだと思います。地縁のない方が移住することは簡単でない一方、地域での暮らしとは、そこで生まれ育った方が安心して暮らしていけることが前提であるべきです。その上で、地域の文化や関係性を尊重した施策、つまり居住経験があったり、両親のルーツがあるなど、地縁ある方々の郷愁をくすぐる取組が重要ではないでしょうか。

ところが行政界隈では、オープンな移住市場にチャレンジしがちです。目の肥えたユーザーの評価は厳しいものがありますし、行政も意識の高い業界に委託料を支払い、モデル的な取組で満足しています。全国的に選ばれる地域が山梨に幾つもある訳ではありません。

また、「不便さや特別な地域資源に魅力を感じ、スペシャルな活動をする人」を賞賛する傾向も見られます。

大切なのは何世代もつながっていく地域の普遍的な価値／東京一極集中を打破する量的トレンドであって、個人の意欲や能力に依存することなく、自然選択で地方での暮らしが選ばれるような環境づくりが重要だと思います。

現在、更に政策が細分化され、二地域居住や関係人口といった中間的分野が注目されるようになりました。意義はありますし、今後拡大も見込まれますが、例えば選挙権など重厚な住民制度を従たる居住地でどう扱うかや、地域の便益をきちんと示さないと、地方創生のごまかしのような分野になりかねません。

2 そんなことを思いながら、

一方で私自身は、約20年ぶりに山梨に帰郷した者として、政策に生かされている訳ではない、という逆説的な誇りもあります。私が山梨で暮らしているのは、この厳しくも豊かな環境と、そして私の郷土への愛着を理解してくれた家族のお陰です。

役人の性で、日頃とかく「何かお力になれることはありませんか」と口にしがちですが、私は自分の生き方に行政に口を挟んで欲しいとは思いません。子育て支援とか移住支援とか、そんなことで選んだ訳ではないのです。

「人間関係は濃いし、暑いし寒いし、子育ても難しいし、都会より不便だけど、私はここが好きで、妻や子ども達と暮らしていくんだ！」

狭苦しい山梨だからこそ、山梨に縁ある方々には不定量な魅力を共感できる気がします。

その上で、やはり政策も必要です（だと思いたい）。個人や社会の理想に協働することは、役人の使命でもあります。その際いつも感じるのは、内容よりも、政策そのものが知られていない／使いにくい／考える余裕がない、という認知・申請のハードルです。

以前、子どもの貧困に取り組んだとき、支援を必要とする方にアプローチする難しさを痛感しました。例えば、子ども食堂は支援のチャネルを開く素晴らしい取組ですが、そこにたどり着けない方に支援をどう届けるか。その人にこそ支援が必要な訳で、粘り強い人間関係や相談が大切ですが、マスコミや国では、新たな社会的ワードや行政外部の目立つ活動に脚光を浴びせがちで、自治体や民生委員さんなどの地道な取組等にはなかなか光が届きません。

幸いにも甲斐市に在籍中、福祉はじめ地域課題に関わる熱意ある方々の活躍を目の当たりにしました。地域課題の解決に際して、そのコア人材は間違いなく自治体職員の皆様です。国に戻って改めて、課題も解決策も、実は地域の中に既にあるのではないかと感じています。

他者との関わりが薄くなり、デジタル化が進む時代だからこそ、国と地方共に意識を持つ者として、その人が必要とする施策を、人が苦心して創り出し、人の温かい手で届ける行政でありたいと願ってやみません。